

中日大学学長フォーラム第一回学術シンポジウム

基調スピーチ

京都大学総長 尾池和夫

日中学長会議は、2000年10月にその第1回が東京で開催されて以来、本年5月に西安で開催されるまで計4回開催されてきました。この間の6年間にわたる日本、中国両国の主要な大学の学長の間で交わされた率直な議論は、双方の大学の参加者の間で大きな財産として引き継がれております。また、その間に築かれたお互いの友情も末永く続くものであると確信しております。

日中両国の大学に課せられた使命は、この交流において培われた学長間の相互の理解や友情を礎としながら、学長個人の枠を越え、大学として地球規模で生じる様々な問題の解決や地球社会の持続的な発展のための努力にあります。現在、アジアを含む世界は大きく変動し、また新たな問題も生じています。例えば中国における急激な経済発展は、新たな需要を生み出し、日本および他のアジア諸国の経済的な好循環をもたらしましたが、同時にかつて日本がその経済発展の途上で経験した環境への影響も、アジア諸国が一体となって解決すべき問題として浮上しつつあります。そして両国の大学は、このような新たな問題に対し、相互の協力による解決の努力を惜しんではないと考えます。

大学は、広く言われるように知を創出する場です。そこで産み出される知は単に生活に便利な機械や道具を作り出したり、経済的利益を生んだり、人々の病を治療したりするといった直接的な成果を得ることに留まらず、人間が本来備えている知的な探求心を満たし、人々の心を豊かにするものでもあると考えます。そしてこの大学がもたらす知は、地球上の異なった歴史文化を持つ人々との相互理解や共通の利益に向けた協力を促すものであ

り、京都大学がその基本理念として示す「地球社会の調和ある共存」に貢献するものでもあります。

中国で言われているように、地球社会の調和ある共存のためには、物質文明、精神文明、政治文明、生態文明が融合発展する必要がありますが、先日、王生洪学長をはじめとする復旦大学代表団が京都大学に来られたときの討論では、これらに第5の文明として、「学術文明」という考えを加えるのがいいという意見が出て、大いに議論がはずみました。そこに両国の大学が協力して果たすべき大きな役割があるという点で、私たちは共通の理解を得ました。

よく言われるように、20世紀には、地球の持つ物質資源とエネルギー資源を使って、文明が発達しました。知財の観点からは、その文明の発達のために、長期間にわたる人類の知的活動の蓄積が十分に活用され、とくに物理学や化学、20世紀の後半に生物学が活用され、生命科学という人類史上でも画期的な学問体系が確立されました。そのような文明の発達と観測技術の発達とともに、オゾンホールが発見などに始まる地球環境の危機が明確に認識されることとなり、エネルギーと資源の貯蔵量の限界の認識とともに、21世紀の人類に多くの課題が存在するという世界の人々の共通認識がもたらされました。食料、エネルギー、環境に関する問題、固体地球内部の資源、水資源、地上の木材資源など、あらゆる資源の問題などがありますが、中でも水や植物資源の問題は日中両国にとっても、とくに重要な問題であろうと思います。

例えば、2002年に世界で伐採され回収された木材は、33億8439万立方メートルでした。先進国では、製材、パルプ材、ベニヤ材などの産業用材が主であり、途上国では薪炭材として消費されています。世界の木材生産量の順位を見ると、1位アメリカ、2位インド、3位中国です。輸入量では1位はアメリカ、2位が中国、3位が日本です。世界の森林は、1990年から2000年の間に、約9400ヘクタールが減少しました。その96パーセントがアフリカと南米だといわれます。世界の森林の95パーセントが天

然林で、人工林は5パーセントですが、世界で消費される木材のほとんどが、人工林で賄うことができる量だと言われます。世界の人類に与えられた課題は、要するに人工林の管理をうまくやることによつて、世界の天然林を守ることです。それは一つの例ですが、このような日本と中国の両国に共通に存在する問題の認識とそれに対する解決が、日中両国の大学に与えられた研究と教育の課題であると思います。そのために両国の大学が情報を共有しながら教育と研究を協力して進めていくことが重要です。

また、経済の観点からは負の要因となる自然災害についての情報を共有し、21世紀の自然災害の軽減に努めることが必要であると考えます。例えば、地震や火山噴火、洪水の災害を世界の記録で見ればわかるように、世界史上最大規模の地震災害は1556年に西安の近くに発生した地震による、83万人の死者であります。また20世紀最大の震災も中国で、1976年の唐山地震であり、24万2千人の死者を出しました。2位も中国の海原地震、3位は関東大地震です。中国も日本も、プレートが集まってきて、岩盤が圧縮され、変動帯が形成される地域にあり、また中緯度の気候に影響を受ける地域にあります。一方に水害があれば、他方には旱魃の被害があり、一方に火山噴火があれば、他方に震災があるというような地域です。黄河や長江の洪水も大きな被害をもたらせます。噴火災害の最も大きい影響を受けるのはインドネシアですが、日中両国の大学はこのような東南アジアなどの地域との連携も発展させていく努力をしなければなりません。

1998年の日本、朝鮮半島、中国の水害は大規模でした。1998年9月10日発行の中国の「水害救援」切手は、50分の切手に50分の寄付金タブが付いていました。1991年の洪水では死者が2300人に達し、そのときには、握手する手とハートが描かれた80分切手が発行されました。その切手には「一方有難、八方支援」という文字が入っていました。この標語は、中国で震災の街を歩いたときにもよく見かけました。

世界の他の地域にはない例もあります。今年、2006年の春の黄砂現象は大変なものでした。中国、日本、韓国、モンゴルの協力で、黄砂に対する対応の研究を進めることが

必要であり、そのような動きを大学として支援していかなければならないと思っています。

水を確保することは中国にとっても、日本にとっても、大変に重要な問題です。水を日本は大量に輸入しています。間接水という呼び方がありますが、食料や木材の形で水を大量に輸入しているのです。中でもアメリカからは、427億立方メートルの水を毎年輸入していて、大変目立っています。その次がオーストラリアの、105億立方メートルで、いずれも牛肉を生産するための小麦の栽培に使う大量の水であります。日本人は、生活用水の直接の給水量も多く、毎日1人あたり322リットルの水を使います。アメリカの425リットルに次いで多い国です。ちなみに、エチオピアでは、たった9リットルです。例えば、このような水の問題だけをとり上げてみても、大学にとって考えるべきことはいくらでも出てくるのです。

平和と平等の問題や、人のこころの問題の認識と、それに基づく教育と研究も重要な課題です。それには自然科学の進歩だけではなく、社会科学と哲学の発達が必要であり、また歴史に関する研究成果の情報の共有と議論が必要です。それらをリードしていくのが大学の役割であろうと思います。

日本と中国は漢字圏の文化を共有しています。かつて遣唐使は、海外情勢や中国の先進的な技術や仏教の経典等の収集を目的として日本から中国へ派遣されました。第一次遣唐使は、630年でした。それ以来たびたびの派遣で、日本は中国から多くのことを学び、それは日本人の思想の背景として定着しています。その文化には西洋の思想にはない独特のものを持っていると思います。日本と中国の大学では、両者の協力によって、その東洋の思想をしっかりと踏まえつつ、西洋の文明と東洋の伝統的な考えの融合をリードしていくことが重要であろうと思います。

例えば、自然科学を論じるとき、現在の国際語となっている英語で討論する技術を教えることも重要ですが、漢字圏の文化として、漢字で自然科学の先端の知識が表現できるように、常に先端の科学の成果を自国語でも易しく表現して、自国の市民に伝える努力を専

門家に求めていきたいと思っと思っています。それとともに、日中両国の大学が協力して科学の新しい知見を漢字で表記するよう、共通の表現を求めていくことが重要であろうと思います。

京都大学が鋭意取り組んでいる「21世紀COEプログラム」の23課題の中の1つに「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」というのがありますが、そこでは、「激しい移行過程にある現代世界を批判的に再検討し、新たな指針を模索するというグローバル化時代の総合的、かつ多元的な人文学的知の形成という課題に、歴史学を中心に、哲学、文学研究を組み合わせることを最大の目的とする」と述べられています。

1897年に創立された京都大学も、この復旦大学も、ともに100年以上の歴史を持ち、東アジアの主要大学として活動しています。京都大学への最初の外国人留学生は1903年に中国から来た学生だったと言われています。私自身が上海を初めて訪問したのは、まだ日中間に直行便の飛んでいない1974年でした。それ以来の上海の発展には目を見張るものがあります。

世界の大学は新たな局面を迎えています。アメリカ合衆国においては国を挙げて競争力を高める論議が交わされ、連邦政府の研究開発投資や科学・工学分野における人材育成のための施策が強化されており、また外国人留学生の獲得に政府が力を入れています。また、ヨーロッパにおいてもそれぞれの国の伝統に立脚する形で大学の教育研究水準を高める様々な試みがなされるとともに域内の学生の流動性を高める努力が行われています。最近では、高等教育を輸出産業として国策に位置づける国も現れるようになりました。

目をアジア諸国に転じると、米欧諸国との間の人材の流動性の高まりやアジア域内の教育制度の拡充により多くの優れた研究人材が育成され、またそれらの人々の活躍の場としての大学の役割が益々重要となっています。そして大学の組織も大きな変革を経験しつつあります。日本における国立大学の法人化、そして中国における985工程といった大学改革の努力は世界から注目されています。

日中大学学術フォーラムは、このような情勢を背景に両国の主要な大学の研究者が率直に問題を討議することを目的として開催されます。「イニシアチブとパートナーシップ—日中大学の新しい使命」という標題に示されるように、両国の大学は知の創出と地球的規模の問題の解決のために主導的な役割を担い、相互に連携していくことが求められています。本フォーラムにおいてはアジア太平洋地域の経済発展のための知の創出と、日中友好における大学の使命と役割について論議が展開されます。両国の主要大学から多くの卓越した研究の成果が報告され、その成果が日中両国の友好と世界の安定した発展に結びつくことを心より願っております。

最後に、主催者の一人として、多忙な時間を割き出席いただいた参加者の皆様に深く御礼申し上げますとともに、本フォーラムの開催に尽力された王生洪学長をはじめとする復旦大学の皆様に心から感謝いたします。

ありがとうございました。

推动文化交流 促进友好合作

——在第一届中日大学学术研讨会上的基调演讲

复旦大学校长 王生洪

尊敬的各位校长、各位学者，

女士们，先生们：

大家好！

有朋自远方来，不亦乐乎？在这个即将辞旧迎新的时节，中日两国众多著名大学的校长和学者们，群贤毕至，令我感到由衷的喜悦和荣幸。在此，我谨向各位嘉宾的莅临表示最真挚的欢迎和问候！

我与在座诸位中的许多人已经是多年的老朋友了。自 2000 年东京大学举办首届中日大学校长论坛以来，我参加了迄今的全部四届论坛，与许多大学的校长们结下了深厚的友谊。今天，我们诸多新老朋友又云集复旦，在中日大学校长论坛的框架之下，举办第一届中日大学学术研讨会。我真诚地相信，这必将进一步地促进和深化我们彼此间的了解与友谊，必将为中日两国著名大学之间——乃至中日两国文化之间——的交流与合作构筑一座新的桥梁。

中日两国是一衣带水的近邻，有着相近的历史文化传统。在漫长的历史发展过程中，中日两国有着频繁、深入而又丰富多彩的文化交流的经验，两国人民留下了许多感人的佳话。在中国的隋唐时期，日本曾先后向中国派遣了约 17 批遣隋使与遣唐使。在他们当中，有大家耳熟能详的吉备真备、阿倍仲麻吕、空海、最澄、橘逸势等著名人

物。中国的鉴真和尚，历经六次东渡，终于在他 66 岁高龄并已双目失明的情况下获得成功，在日本遣唐使藤原清河一行的陪同下，踏上了日本的国土，实现了他多年的愿望。鉴真一行受到了天皇为首的日本举国上下的盛大欢迎，轰动了日本全国。他在日本生活了 10 年，最后在日本圆寂。以阿倍仲麻吕、鉴真等人为代表的那些可敬的人们，为了两国的友好交流，不畏路途艰险，不惧惊涛骇浪，不惜付出生命和永别故土的代价。他们当中的绝大多数人甚至连名字都没有留下，但他们的精神和贡献却永远为两国人民所敬重所怀念。2004 年以来，因当年日本留唐学生井真成墓志的出土而在日本和中国引发的“井真成热”，正是中日两国人民对中日文化交流先驱者们深切缅怀的一个反映，也是两国人民热爱与渴望中日和平友好之情的一个体现。

近现代以来，尽管中日两国关系遭遇了严峻的挑战和冲击，蒙上了重重阴霾，但是中日两国人民呼吁和平、渴望友好的愿望依然涌动不息。新中国的几代领导人，在不同的历史时期，都对中日关系给予了极高的重视，为改善和促进中日关系殚精竭虑，不遗余力。日本国内爱好和平的力量，也始终在为一个睦邻友好的中日关系而不懈努力。我非常高兴地注意到，就在我们筹备这个会议期间，今年 10 月 9 日，日本新任首相安倍晋三成功访华后，两国政府在联合新闻公报中明确指出，中日两国要“努力构筑基于共同战略利益的互惠关系，实现中日两国和平共处、世代友好、互利合作、共同发展的崇高目标”。我认为，公报的这一宣示准确地揭示了中日关系的本质。尽管中日之间有着种种矛盾和摩擦，但是中日存在着广泛而巨大的共同利益乃是

不争的事实。在贸易领域，1993~2003年，日本连续11年为中国最大贸易伙伴，目前依然是中国的第三大贸易伙伴。而且，日本已成为中国的第三大外资来源地。据日本贸易振兴机构（JETRO）公布的数据，2005年日本对中国直接投资为65.72亿美元，比2004年增长12%，占日本海外投资的14.4%。这是一个十分可观的比例。中国则是日本的第二大贸易伙伴，中国所提供的低成本生产和低价格产品提高了日本普通消费者的福利水平，为日本降低通货膨胀作出了贡献。至于在政治外交领域，中日可以合作的舞台则更大，共同利益更多。譬如，在妥善解决朝鲜半岛无核化的问题上，中日两国即存在着共同的利益和愿望；再譬如，在联合国框架中开展地区性维和活动、防止大规模杀伤性武器扩散等众多问题，也都在相当的程度上依赖于中日之间的合作。因此，我由衷地相信，两国政府确立的这一崇高目标，不仅符合两国政府的共同利益，而且代表了中日两国人民的愿望和呼声。

各位校长、各位学者，女士们、先生们，当前，亚洲正发展成为世界经济的实际驱动力，过去五年，亚洲在全球实质GDP增长中的比重高达50%以上。即使以当前美元价格计算，亚洲对全球GDP增长的贡献率仍高达21%，已超过美国的19%。与此相联系，亚洲的迅猛崛起正日益成为影响世界格局演变和发展的重要因素，亚洲地区的和平、稳定与发展正日益成为维护世界和平、推动全球经济发展的重要基础和动力。作为亚洲地区的两个大国，中国和日本理应在这一方面作出自己的贡献。而且，中日两国目前都正处于国家发展的最佳战略机遇期和历史发展的紧要关头，和则两利、斗则两伤。营造和谐的国

际环境，谋求国家发展，是现阶段中日之间最大的共同利益，也是实现上述崇高目标的重要保证。因此，以史为鉴，面向未来，不断推进彼此间的友好交流与合作，不断构筑和扩大共同的战略利益，友好相处，合作共赢，乃是符合中日两国根本利益的唯一正确选择，也是中日两国政府和人民应共同致力的一项崇高事业。

历史的经验表明，文化与学术的交流常常是国家之间友好交往的源头活水和强大推动力量。大学，作为传播文化和寻求真理的机构，无疑可以在促进国家、人民的友好交往方面发挥巨大而不可替代的作用。近年来，在中日两国的文化学术交流与合作中，大学始终扮演着重要的角色。得益于得天独厚的地缘因素和源远流长的文化渊源，中日两国在高等教育方面的合作有着十分广阔的发展潜力和空间。我认为，在这一问题上，中日大学至少可以在以下方面大有作为。

第一，大力支持学生的广泛交流。青年是国家的未来，两国青年的相互了解、理解和友谊，是中日两国世代友好下去的保证。因此，中日两国之间大学生交流活动的意义绝非仅限于学生培养本身。近年来，中日两国大学学生交流的规模正在不断扩大。以复旦大学为例，近年来我们接受日本高校派遣的交流学生始终保持近 600 名的规模。但是，由于学分转换、奖学金金额与覆盖面、语言障碍等因素的制约，中国学生赴日本交流的规模尚需进一步的大力推动。仍以复旦大学为例，今年赴日本高校交流的 35 名学生，在近千名的赴海外交流学生中仅占很小的比例。对此，我呼吁中日双方的大学应采取切实的措施，尽可能创造更多的便利，给予学生交流更多关注和支持。

第二，大力加强科研领域的合作力度。众所周知，日本的科技水平一直在世界范围内处于领先地位。日本众多的著名大学为此作出了杰出的贡献，积累了丰富的现代前沿科学研究经验。正在实施之中的 21 世纪 COE 计划，是日本政府大力提升高校学科与科研水平的一项战略举措。当前，中国正在大力建设创新型国家，中国的大学要成为科技创新的生力军，要成为国家科技创新体系的重要组成部分，也正在大力推进科技创新平台与基地建设。在此背景下，日本政府和众多著名大学的经验和举措值得我们认真借鉴。中日大学加强科学研究领域的交流与合作，有利于两国科学家的成长和相互学习，有利于实现重大的科研突破，也有利于两国人民深层次的相互理解与交流。

第三，共同推进现代大学制度建设。目前，为适应新形势的要求，增强高校的活力和国际竞争力，中日两国的高校都在进行体制机制的改革，包括大学的重组合并、大学自主管理、竞争性的科研拨款体制、推进国际化等。这些改革虽然面临着不同的背景，但也存在着许多共性的问题，有值得相互借鉴的地方，譬如，日本正在推进的国立大学法人化就带给我们很多启示和思考。双方积极开展这方面的对话与合作，有助于推进两国高等教育界的深入了解和交往，有助于在各自学校乃至各自国度培育和完善的现代大学制度。

此外，中日许多的著名大学都拥有有关国际问题的研究机构。就日本方面而言，京都大学有东南亚研究所，庆应大学有东亚研究所，东京大学有社会科学研究所和东洋文化研究所，早稻田大学有亚太研究中心，北海道大学有斯拉夫研究所，等等。同样，中国的北京大学

有国际问题研究所、亚太研究院，清华大学有国际问题研究所、国际战略研究所，南开大学有日本研究院，吉林大学有东北亚研究院，复旦大学则有以日本研究中心、韩国研究中心和美国研究中心为主体的国际问题研究院，等等。而所有这些高校，都在两国经济、文化和社会生活中具有广泛的影响力。我们应当充分挖掘和利用这一方面的优势，积极发挥大学的影响，用大学的良知和教授们的睿智来为中日两国关系的改善而建言献策。

大学是社会的良心，是人类精神的家园。和平、友好、和谐、合作，是社会发展的理想境界，是人类无数世代梦寐以求的永恒价值，是人类文明发展的结晶和瑰宝。捍卫这些理想，维护这些价值，推动人类文明的不断发展，促进不同文化之间的理解和交流，既是大学的神圣使命，也是大学的尊严所在。在中日两国拥有广泛共同利益、同处历史发展紧要关头、中日关系面临崭新机遇和挑战的今天，中日两国的大学，特别是那些拥有巨大影响力的著名大学，有责任、有义务、同时也应当有信心承担起推动和促进中日友好合作的重任，为中日两国人民的友谊和两国的共同发展开拓崭新的境界。

尊敬的各位校长、各位学者，女士们、先生们，中日大学学术研讨会的首届会议选择在复旦大学召开，这充分表明了大家对复旦的信任，令我们倍感荣幸和鼓舞。我相信，在各位校长的热情支持下，在各位学者的积极参与下，本届研讨会一定能够围绕“创新与合作——中日大学的新使命”这一主题展开充分的交流与讨论，一定能够收获大量极具启发意义的真知灼见。不积跬步，无以致千里。尽管我们的

研讨会才刚刚起步，但是，我真诚地相信，只要大学的良知仍在，只要中日两国人民对和平友好的热爱仍在，我们的中日大学学术研讨会就一定能够在促进中日文化教育事业的交流与合作、增进两国人民的相互了解和友谊、推动中日友好关系的深入发展等方面，发挥积极而令人自豪的价值与作用。

谢谢大家。祝各位在上海工作顺利，生活愉快。